



町民文芸

只見短歌会

三月詠草

大塚栄一

指導

被災地に送る毛布を雪晴れの束の間干して温みをもたす

目黒 富子

亡き友の面影偲び手向けたる香の煙にむせび咳込む

皆川 恒子

春彼岸にうから集へば亡き母も笑みつつ部屋に入り来る思ひす

古川 英子

唐突な大地震に介護士ら優しく声かけ労りくるる

五十嵐英子

凄まじき地震の災禍に放射能汚染広がり農家ら嘆く

渡部ゆき子

瓦礫のなか命繋ぎし祖母と孫の九日間の辛さを思ふ

馬場 八智

病にて逝きたる夫がリウマチの妻を身内に頼みしと言ふ

五十嵐夏美

原発の汚染連日伝へられ広がる風評被害恐ろし

渡部ヨリ子

避難するとわが町に來し幾人か雪の嵩見て帰りしと聞く

新国 洋子

(出 詠 順)

只見俳句会

四月例会

目黒十一

指導

震災のすべて受け入れ春の雨
木の芽時戻せぬ時に立ち向かふ

修 一

まだら雪銃後支えし隣組
春の日や思っても見ぬ賞を受け

リウコ

かた雪を渡る人影犬走しる
三猿の庚申塚や山笑う

邦 男

一步たり許されぬ地の蜃気楼
新天地の階段下りて水芭蕉

笑 羊

定年や身軽き今朝のしじみ汁
押切りの棒鱈さざむ力かな

吉 児

春満月川の兩岸雪残し
落花してなお赤々と菽椿

洋 子

(横山哲夫さん逝く)
春の雷昔ばなしのように過ぐ
残雪やいっちょよさけたと申さるる

恒 夫

薄氷や底に動かぬ緋鯉見え
服カバン借物なれど進学す

一 穂

雪解川ふるさと離れ子の元へ
濁流の一夜に増して柳の芽

隆 堂

待春や野菜畑を割り振りて
堅雪やけもの足跡入り混じり

敦 子

春の雪去年の日記出して見る
列島へパンダを追って胡沙来る

邦 夫

雪つぶて投げ上げて落つ雪の中
漬菜煮を一菜とせり雪ごもり

礼

春立ちて豊かな光の中におり
新刊の匂いをめぐり春炬燵

康 女